響子はパスタにはほとんど手をつけなかった。ワインとサラダだけで食事を終える気配だ。

「食べないと身がもたないぜ。今夜もこってりと可愛がってやるんだから、スタミナをつけておきなよ」

「だって･･･これからお浣腸なんでしょ？食べるとお腹が張って辛くなるのよ。あなたは浣腸責めがどれほど辛いか知らないんだから･･･」

響子はすねるような表情で雅人の肩を軽く叩いた。

「よし！それじゃあ響子のリクエストどおりに､食後の浣腸だ！デザートは響子先生の肛門ってことだな｡」

「私を辱めるいやな言い方ばかりするのね。恥ずかしくてたまらない」

エプロンをはずした響子は、菱縄縛りの縄掛けのまま、リビングの床に四つんばいになる。観念した生贄の姿だ。

そのままの姿勢で、雅人がグリセリン原液を湯で薄めている作業を見た。

「そんなに多く作らないでよ」

「響子先生の尻にはたっぷり飲ませてやらないと物足りないだ

ろ。そんなに大きな尻をしていて何言っているのさ。今夜もたっぷりとおかわりをしてくれよ」

「たくさん入れられるとおなかが破裂しそうなくらい辛いの･･･先生を哀れだと思って少しにして･･･だってあなたに毎晩、浣腸責めをされているのよ。わたしのお尻は毎日の浣腸で爛れたようになっているわ･･･たまらなく辛いのよ」

「そのおかげで色っぽいけつになってきたよな。肛門も柔らかく膨らんでいるぜ。浣腸はさ、美人先生の日課なのさ。もう浣腸なしではいられない体にしてやるぜ」

浣腸器にグリセリン液を充満させた雅人は、女教師の背後にしゃがんで、股間を通る二本の赤い縄を左右にぐいっと分ける。響子のアヌスが顔を出した。可愛いアヌスだ。ひっそりと双臀の奥に隠花のごとくたたずむアヌスは、指で突くときゅっと収縮を繰り返す。

　アヌスの中央に指先を突き入れてじわじわと力を入れていく。

「ああっ･･･入ってくるわ･･･」

響子がうめく。雅人の指先が沈んでいく。響子のアヌス調教を

始めたころは、こんなに柔らかくはなかった。むしろ窮屈すぎて指一本でも挿入するとひどく痛がった。それが今では、押しつけるだけで、もう指の第一関節まで女教師はアヌスに迎えている。柔らかくほころんでいるアヌスだが、きゅっと締め付けてくるこの感触は、アナルセックスへの誘いだ。